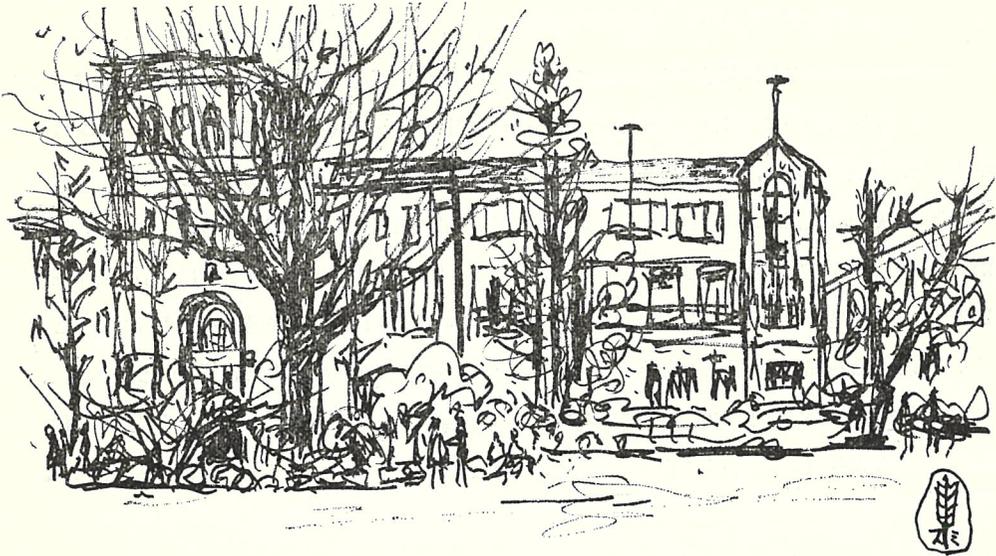


ひふりおてか



同志社大学図書館報 No. 1. 1967.7.1

発刊にあたって

かなりの準備期間ののちに、同志社大学図書館報が発刊の運びとなりました。

図書館に対する貴重な助言や忠告，図書館活動の報告や展望，図書館員の思いや願いが，逐次掲載せられて，ささやかなものではあっても，大学図書館としての使命を遂行するうえに大きな支えとなりますよう，念じてやみません。

図書館長 小 橋 一 郎

事実をかぐ鼻

中 桐 大 有

現代の印刷機から流れ出るおびただしい量の書物は，そのほかの大量生産物のなかに互して決して肩身のせまいものではなからう。主として知識の媒体であるこの大量の書物は，人類の知能生活に奉仕させられ，その拡大と水準向上とに不可欠の要件となっている。グーテンベルクの活字印刷機の発明は500年前のことであった。それ以来引きもきらぬ書物の大量化現象は，人類の大量を知的文明をもった生物につくりかえてきた。

ところが，書物が人類の知能生活に奉仕させられる過程には，その逆過程すなわち人類の知能生活が書物に奉仕させられる過程もともなわれざるをえなかった。書物を読み，本を見よ，知識はすべて書物のなかに探求される，こういった知識探求の守則が，いつのまにかわれわれの間で黄金則になってはいないか。このことの一つの責任は，これでもか，これでもかといった調子で売らんかな，読まんかなの書物づくりに逆上するブック・メーカーにあるとあってよからう。知識を書物のなかに

だけ探求する伝統が正統化されるころには、知識の新しい創造口がふたをされてしまう危険がある。人類の新しい知識の多くはいつも、書物のなかにではなく事物のなかに探られたものであった。とくに科学的知識はそうであった。

知識を事物のなかに探求するという新しい守則の伝統は、17世紀になって近代の科学的知識の進歩に突破口を開いた人びとによって創始された。磁気の研究で有名なウィリアム・ギルバートは、1600年のその著書「磁気について」を「知識を書物のなかにでなく事物そのもののなかに探求する」ことに捧げている。そのころすでに創造的發展をやめてしまっていた伝統的な学問の不毛化の原因が、書物のなかにだけ知識を探求する伝統の固成にあると考えたフランシス・ベーコンは、ギルバートと同国のイギリスではほぼ同じころに、知識の新しい創造の源は「事物との取り引き」にあるのだと書いた。

ギルバートがその著書を知識探求の新しい伝統の創始に捧げてから間もなくして、フランスのデカルトは、当時学校で書物のなかだけから学んだ知識が確実さと明晰さの点で頼りないものであり、空疎無益な論議の火煙に注がれる不純油であるにすぎないことに気がつき、書物のなかの「文字」が「人生に有用なすべての明晰で確実な知識」を与えるだろうと言った教師たちの約束の偽りであることを知って落胆した。そして、デカルトは書物をけいべつしはじめ、「世間という書物」を読み、自分の行動のなかで事物を明らかにみるために、絶え間ない旅行に身を託した。現代のわたしは、とくに若い世代のすごい旅行熱が、知識を事物のなかに探求するというこういった伝統の盛り上げにむだなく役立てられることを期待したい。

書物のなかだけに知識を探求する伝統の固成は、新しい知識の創造をも知識の革新をももたらしえない。昔アリストテレスは、女性は男性より劣っているので女性の歯数は男性の歯数より少いと書いた。女性の歯数についてのこういった知識がうその知識であることを見破れないのは、知識を書物のなかにだけ探索する連中だけであるだろう。この連中と同じようにアリストテレスも、自分の奥さんの口の中をのぞいて見たことがなかったようである。知識の革新と新しい知識の創造には、書物のなかを探す目よりも事実をかく鼻の方が必要である。

こう言っているとわたしには、重いものは軽いものよりも速く落ちるというその知識をうかつにも何千年の間信じこまされてきたすべての人びとの間に、重いものも軽いものも一樣の速さで落ちるという革新的な真の知識をもたらしかねたの鼻をあかせたときのガリレイの顔が目みえてくるようである。その顔のどまんなかには、今しがた事実をかいたのだといわんばかりにびくびく動いている鼻がとくに印象的に見えるかのようである。ガリレイには、重いものが軽いものより速く落ちるという知識に論理的矛盾が含まれていることを論証する頭があった。もし重いものが軽いものより速く落ちるのなら、重いものの速さは軽いものの速さより大きいわけである。それなら重いものと軽いものを連結して落したらその速さはどうなるか。当然両者の速さは牽制し合って連結体の速さはその中間の大きさになるはずである。ところが他方、連結体は連結された重いものと軽いものいずれよりも重いから、両者の速さのいずれよりも大きい速さになるはずである。

あきらかに問題の知識にはこのような論理的矛盾がある。この矛盾をえぐり出したガリレイは、長い間人類の知性をたぶらかし通してきた、論理的矛盾を含むこの知識から脱出し、これを革新する道を見出さざるをえなかった。

それは鼻で事実をかく道であったのである。あのピサの斜塔の上から重い物体と軽い物体とを落してみても、両者が落下する運動の事実のなかにかねは、重いものも軽いものも一樣の速さで落ちるという画期的な知識を探り当てたのだ。うその知識をまことしやかに思いこみ、これとこころよく戯れてきた人類の知性にとっては、これはまさしく青天の霹靂であった。

(文学部教授)

同志社大学図書館の歴史(その一)

1875年(明治8年)11月29日、上京第22区寺町丸太町上る松蔭町18番地高松卿仮寓の邸宅のうち約半分(現新島旧邸のあたり)を借り受け、これを仮校舎とし8名の生徒で発足した“官許同志社英学校”は、翌1876年(明治9年)9月には生徒数70余名となり、校舎も新しく相国寺門前旧薩摩屋敷跡(現クラーク記念館のあたり)に、まず2階建2棟の校舎を、つづいてその北側に食堂1棟を建て、十分とはいえないまでも、生徒の増加にともなって、着々として施設・設備の充実に努力されたのであった。

そして後年、校祖新島先生はその日記の中で、わが同志社の真に輝けるものとなるであろうと確信された3つの要素を挙げ、その1つに「優秀なる図書館」を加えておられるのであるが、すでに早く、このような学校における図書館についての考えを、草創期の諸事困難ななかであって現実に示されたものに、“書籍縦覧室”の存在がうかがうのである。

それは前述の校舎のなかの一室に“書籍縦覧室”が設けられたことである。すなわち、二棟の校舎は東西に相対して建てられ、東の校舎を第一寮舎、西のそれを第二寮舎と呼ばれたのであるが、東の第一寮舎は文字通り“寮”として使用され、第二寮舎は一階を講室、講堂その他に、二階は“寮”に用いられ、この一階の東側の室に“書籍縦覧室”すなわち図書室があったのである。

この図書室は長さ約四間(約八米)ばかりの部屋であって、はじめの頃には内外の新聞、雑誌多数と、数百部ほどの主として洋書が備えられていたようになって、規模としてはさきやかなものではあったが、完全な自由接架方式の閲覧室であったので生徒は全く自由に利用することができたものようである。また図書係としても所謂アルバイトの生徒がこれに当り、明治前期の哲学者として著名な大西祝博士(1881年英学校本科、1884年同予科卒業、東京専門学校一現在の早稲

田大学一教授)も当時アルバイト学生として図書係をしていた話がのこされている。そして年とともに生徒数も増加し、校舎も増築され、それにもなって蔵書数もまた増加の一途をたどり、1887年(明治20年)、書籍館(現有終館)が建つまでには三千冊に近い蔵書を備えるようになったのであるが、いずれにしてもこの図書室はわが同志社大学図書館の起源をなすものといえるのである。

なお、この図書室とは別に同志社の創草期ともいえるこの時期に、一身をうちこんで同志社の創立と発展に情熱をかたむけられた新島先生は自分自身の貴重な蔵書をも公開して教員生徒などの利用に供されたのである。これは学校の蔵書の不足を補われる意味もあったのではなからうかと推察するものであるが、これらの蔵書は今も新島旧邸文庫として、往時のままの姿で旧邸の先生の書齋に保存されている。その数およそ一千冊、その多くは先生が帰国の際に米国からもち帰えられた洋書であったと思われるものであって、貸出も90日間という長期にわたってされていたことがうかがわれるのである。

いずれにしても、このころ、すなわち1875年(明治8年)の同志社の創立から、1887年(明治20年)の書籍館の開館前後の時期は英学校の開設にはじまり、同志社諸学校の増設、さらに大学の設立への準備とあわただしい日日ではあったと思われるが、また一方、困難ななかにも新島先生を中心として学校全体が一つとなって、あらゆる点で教育の充実に努力したことがしのばれるのである。そして、図書館についても先生が米国をはじめ欧州先進諸国の教育事情をつぶさに視察され、社会教育機関としての公共図書館とともに学校教育・大学教育における学校図書館・大学図書館の必要性を痛感されていて、それがこの図書室、書籍館として、また個人蔵書の公開というかたちで、より早い時期にあらわされたといえるのである。

書籍縦覧室のころ

文献探索 ——二次文献の利用——

図書館で文献を調査、探索する場合、まずその図書館の蔵書目録というものがありますが、本学図書館には著者、書名、件名、分類、雑誌・新聞等の各種目録が備え付けられており、特定の著者や書名、主題から文献が検索出来るようになっています。又図書館だけでなく、本学の各学部研究室等に所蔵している文献の全学の総合目録カードが作られています。文献を調査・探索する場合、このような目録を有効に利用することは当然ですが、これらの目録では機能上いろいろな限界があり、どうしても検索出来ないものがあります。こういった不備、限界をどのような方法で補っていくか、ここでは簡単ですがその資料探索のツールを紹介することになります。

1. 雑誌記事索引

雑誌については、どういう誌名の雑誌があるかはわかりますが、雑誌の内容の論文については目録は作られていません。ですから雑誌論文を探そうとする場合には、別に「雑誌記事索引」というものがあります。

a) 総合索引

i) 雑誌記事索引 国立国会図書館

人文科学編 1948-

自然科学編 1950-

ii) Readers' guide to periodical literature. 1903- New York, Wilson.

iii) International index to periodical literature. 1907- New York, Wilson.

iv) Bibliographie der deutschen Zeitschriften-literatur. 1896- Gautzsch b. Leipzig, Dietrich.

v) Bibliographie der fremdsprachigen Zeitschriften-literatur. 1911-19, 1925/26- Gautzsch b. Leipzig, Dietrich.

b) 専門別索引

i) 経済学文献季報 No.1 (1956) - 経済資料協議会編 有斐閣

ii) 法政・経済・社会論文総覧 天野敬太郎編 刀江書院 昭和2~3 2冊

iii) 最高裁判所邦文法律雑誌記事索引年報1957-

iv) Business periodicals index. 1958- New York, Wilson. Monthly. 随時累積

v) Index to legal periodicals. 1908- Published for the American Association of Law Libraries.
New York, Wilson. Monthly. 年刊累積, 1926年以降3年間累積

vi) Index to religious periodical literature. 1949- American Theological Library Association. Annual.

c) 単独雑誌の索引

i) 雑誌総目次索引集覧 天野敬太郎編 日本古書通信社 1965

これは個々の雑誌の索引を集めて一覧にしたものです。この集覧に掲載以降(1965年1月)のものは「日本古書通信」(月刊)の「最近の書誌図書関係文献」に掲載されています。

2. 新聞記事索引

新聞記事を調べるものとして、「新聞記事索引」とか、「ニュース・ダイジェスト」というものがあります。外国ではこういった便利なツールがありますが、わが国では残念ながらありません。ですから各新聞の「縮刷版」とか、神戸市立図書館編「戦後国内重要ニュース索引」, 「新聞月報」, 「総合世界資料」等を利用する以外に方法がありません。

i) 新聞月報 1958- 新聞月報社

ii) 総合世界資料 1958- 世界資料アーカイブ 旬刊

iii) Facts on file. 1940- New York, Facts on File Inc.

iv) New York Times index. 1913-

v) The official index to the Times. 1906-

vi) Keesing's contemporary archives. 1931- London, Keesing's Ltd.

3. 全国書誌目録

国内で出版した文献をできる限り網羅的に収録した書誌を「全国書誌」といいます。特定主題の文献を調査収集したり、書誌を作成しようとする場合の基礎になります。

- i) 納本週報 昭和30年6月- 国立国会図書館
- ii) 全日本出版物総目録 1951- 国立国会図書館
- iii) 日本総合図書目録 1961年版- 日本書籍出版協会
- iv) 出版年鑑 昭和25年版- 出版ニュース社
- v) 出版ニュース 昭和21年11月- 出版ニュース社 旬刊
- vi) Cumulative book index. 1898- New York, Wilson.
- vii) Books in print: an author-title-series index to the Publishers' trade list annual. 1948-
- viii) Publishers' trade list annual. 1873- New York, Bowker.
- ix) British national bibliography. 1950- London, Council of the British National Bibliography, British Museum. Weekly.
- x) English catalogue of books. 1835- London, Publishers' circular. Annual.

4. 主題書誌

これは設定した特定主題の観点から資料を収録したもので、今までに単行書や雑誌で種々出ていますから、そういう書誌類を最初に利用すれば、今までにどのような文献が出ているかすぐわかるので一番早道です。これについては沢山あるので省略します。

5. 総合目録

利用したい文献が本学になくて、他の図書館に所蔵されていないかどうか調べたいときは「総合目録」というものがあります。これは図書館間の相互貸借を進めていく上に必要なもので、複数の機関が協力してつくった目録で、収録資料の所在がこれでわかります。このような総合目録がつけられるためには、その前提として各館の蔵書目録が整備されてはじめて出来ることで、わが国では残念ながらまだまだといった感じです。ただし、雑誌に関しては各種のもが出ています。

- i) 新収洋書総合目録 1954- 国立国会図書館
- ii) 学術雑誌総合目録 1953- 文部省大学学術局 人文科学 和文篇, 欧文篇
自然科学 和文篇, 欧文篇
- iii) 全国公共図書館逐次刊行物総合目録 第1-4巻 国立国会図書館
第1巻: 近畿編 第2巻: 東海北陸編 第3巻: 関東編 第4巻: 中国編, 四国編
- iv) British union-catalogue of periodicals. London, Butterworth, 1955-58. 4 vols.
- v) —. Supplement to 1960. 1962.
- vi) The national union catalog. 1953- Ann Arbor, Michigan, Edwards.

6. 官庁刊行物目録

国の政治、経済の調査研究に極めて重要な資料として、官庁資料があります。このような資料を調査収集する場合に必要なものとして「官庁刊行物目録」というものがあります。

- i) 官庁刊行物総合目録 第1-8巻 国立国会図書館 昭和27-35
これは第8巻で終り、以後は「全日本出版物総目録」に併合されることになった。
- ii) 政府刊行物月報 昭和32年1月- 政府刊行物普及協議会編 政府刊行物サービスセンター刊 月刊
なお、官公庁の刊行物を知るための目録類については「官庁刊行物展示会目録と解説」の第2部官庁刊行物の目録類を参照して下さい。

7. 書誌の書誌

いろいろな記録情報を収録しており、必要とする情報源への手がかりを得ることが出来るものとして、「書誌」というものがあります。このような書誌で、今までにどんなものが出ているかを調べるものとして「書誌の書誌」というものがあります。

- i) 本邦書誌の書誌 天野敬太郎編 問宮商店 昭和8
- ii) 最近の書誌図書関係文献 天野敬太郎編 (「日本古書通信」に毎号掲載)
なお、天野敬太郎編纂による昭和40年末までの「本邦書誌の書誌」が昭和42年夏頃刊行の予定である。
- iii) A world bibliography of bibliographies... Ed. by Theodore Besterman. 3rd & final ed., rev. & greatly enl. throughout. Geneve, Societas Bibliographica, 1955-56. 4 vols.
- iv) International Bibliographie der Bibliographie. Hrsg. von Hanns Bohatta & Franz Hodes. Frankfurt am Main, Klostermann, 1950.

8. 参考図書の解題

今までに紹介したような書誌、目録、索引等の二次文献のほか、辞書、百科辞典、主題専門事典、便覧、人名、地名事典等の参考図書を紹介し、解説したものに、「参考図書の解題」があります。

- i) 参考調査資料概説—書誌と参考図書— 長沢雅雄著 三田図書館学会 1967.
- ii) 日本の参考図書 国際文化会館編 日本図書館協会 昭和40
- iii) 参考図書の解題 弥吉光長著 理想社 昭和30
- iv) 研究調査参考文献総覧 波多野賢一、弥吉光長共編 朝日書房 昭和9
- v) 内外参考図書の知識 田中敬、毛利宮彦著 図書館事業研究会 昭和4
- vi) 特集：日本における二次刊行物の現状 (学術月報, Vol.13, No.9・10)
- vii) Guide to reference books. Ed. by I. G. Mudge. 6th ed. 1936.
- viii) Guide to reference books. Ed. by C. M. Winchell. 7th ed. 1941 and 4 supplements.
- ix) Guide to reference material. Ed. by A. J. Walford. 1959.
- x) —. Supplement. 1963.

▼ カウンターから

「オーバーをぬいで持物をロッカーに入れてからはいって下さい」このことばをカウンター係員は日に何度繰返すことでしょうか。まったくテープ・レコーダーに吹き込みたいぐらいです。大ぜいの学生の中には色々な人がいます。書庫入り口の掲示も何のその、大きなバッグをぶらさげてゆうゆうと入庫してしまう学生、「へえ風呂屋みたいや」「パクられると困るからやろ」などはまだよい方、「ほんならはいるのやめよ」と帰る人もあれば「すみません」と外に出て行って大分経ってから走ってくる人、これは図書館備付のロッカーを学生のロッカー・ボックスとまちがえて遠くまで入れに行ったのでしょう。

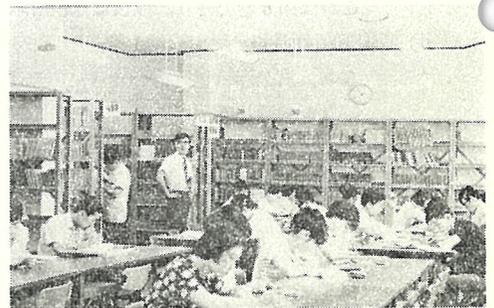
またマフラー、オーバーをとらせてみればシャツだけがかえってこちらが恐縮したこともあります。女子学生はとくにやっかい。カウンターの上からはオーバーに見えたものが実はスーツの長上着で、ぬいでブラウスなりにになっているのを見るとシマッタと係員があわてます。

とかく学生は掲示を見ないものです。何とか係員がいちいち注意しなくても規則をのみこんでくれるよう、と思うのですがむつかしいものです。本についての応待だけしていればよいように思われがちの現場ですが、なかなかどうして。すべての学生に快適に勉強してもらおうと思えば、こんな苦労もせねばなりません。嗚呼天職!

読書室紹介

「新町にも読書室があったらなあ」とは、よく耳にするとところでしたが、この四月から、臨光館の旧三・四番教室を改造して生れた暫定的な読書室はその要望に少しでも答えようとするものです。最近では、一日、二百人近い学生が利用しています。一般教育課程の学生を対象にして、蔵書はその科目の参考書を中心にしています。しかし、参考書(事典、辞書、便覧、年鑑等)は特に幅広く収書して、利用者の便に供するよう配慮いたしました。利用方法も、授業の合間に気軽に利用してもらうため、学生証を提示するだけになっております。開館時間は九時から四時まで(但し、

土曜日は九時から十二時まで)です。なお、利用度の高い図書は複本で揃えるとか、新聞・雑誌などを置



いてできるだけ多くの人に利用してもらう努力を続けてきました。読書する時はもちろん自習や新聞、雑誌をちょっと見る時にも新町読書室を大いに活用してもらいたいものです。

小室・沢辺文庫

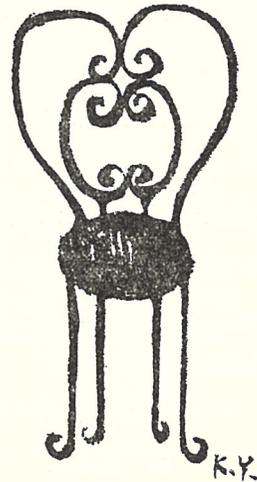
本館には過去において数多くの特殊文庫が設置されていて、それらは大部分が校友・同窓をはじめ社会一般の篤志家から寄贈を受けたものである。そして、そのなかには特定の個人の旧蔵書のもの、特定の個人を記念して集書したもの、および指定寄付金を基金として本館が集書したものの三種類に大別することができる。その第一に類するものには植木文庫、愛山文庫、^{なまえ}生江文庫、浮田文庫などがあり、第二は小室・沢辺文庫、新島文庫などであり、第三に属するものには小林文庫、安東偉人文庫などがある。そして、これらの寄贈図書は過去において本館蔵書の主体となっていた事実も私学の図書館の生いたちを物語るものとして興味深いものがある。次に述べようとする小室・沢辺文庫は本館の歴史のうえで、画期的な“独立した図書館”（現在の有終館の建物）が建てられた1887年（明治20年）から間もなく、しかも本館としては最初に設置された特殊文庫である。

すなわち、この文庫は、京都府宮津市の出身で、1874—5年（明治7—8年）ごろ片岡建吉、河野広中、中島信行らとともに国会開設運動にしたがい、大いに民論を喚起し立憲政党的創立に尽しその幹事となり、また沢辺正修の天橋義塾にも招かれ、のち大阪日報社に入っても自由民権論を鼓吹、啓蒙的著作の多くをのこした小室信介（1852年—1885年）と、同じく京都宮津の出身で、天橋義塾を興しその社長となり、民論の鼓吹に努めて立憲政党的の幹事にもなり、のち京都府会議員となった沢辺正修の両氏を記念するためのものである。

その開設に当っては両氏の同志社の旧友であった中島信行、木村栄吉、松本誠直氏らが相謀って総計619円40銭の浄財をあつめ、これで内外新古の書籍5,146冊をあつめ小室・沢辺記念文庫と名づけて一括本館に寄贈、本館はこれを受けて1891年（明治24年）10月3日、同志社を挙げて同文庫の開庫式を同志社公堂においてとり行った。そして、この文庫約五千冊の図書は

当時の図書館（現在の有終館）の二階南側中央の部屋（現在の本部庶務部の部屋）に排架され、これによって本館の蔵書は倍増するに至ったのである。

この文庫には和漢洋の図書五千冊以上が収められていたのであるが、これを図書の内容主題別に見れば自然科学、芸術部門のものはほとんどないがそのほかは一応各部門にわたっている。しかしながらそのうち歴史（主として日本史）関係のものが最も多く、しかも近世の写本が相当数をしめている。そのなかには水戸藩の儒臣で、同藩の史館総裁となり「大日本史」の校訂に努め、その出版のための底本を作成した立原翠軒（1744年—1823年）の自筆稿本、自筆写本、旧蔵書の多くと、^{はなわほきのいち}塙保己一（1746年—1821年）の和学講談所旧蔵書などや、江戸時代名家の旧蔵書がふくまれている。本館蔵書のなかで異彩を放っている。



特殊文庫（その一）

図書館員の声

<ピックアップ>



ここに紹介の本は表題の通り新島先生の逝去前後の様相と当時の新聞、雑誌等に掲載された追悼文を池本吉治氏が146頁にまとめて東京の警醒社より発行された書冊である。巻頭に新島先生の肖像画一葉と小崎弘道氏の序文2頁がある。

先生の死は明治23年1月23日である。この本の出版は23年4月15日で先生の逝去直後である。先生のことについて書かれた最初の文献として正に貴重なものではなかろうか。

先生が大磯の百足屋にて病いが重くなられ逝去される迄の様子及び京都に於ける葬儀の様相が手にとるが如くくわしく書かれ涙なくして読むことは出来ない程の感動を与えるものである。

ただこの本は当図書館には僅か一冊しかなくそれも大阪の福音社から寄贈されたものがあるだけである。残念なことはクロースにて製本され原型のままでないことである。何れ複写して学生諸君の閲覧に供したい。

私が入社した当時、今でもそうですが、友人、知人等に勤務先を聞かれ「大学図書館です」と答えると、必ずと云ってよいほど「いいですね、本が読めて…」とか「よく勉強ができるでしょう。」等と云われる。

本人は世辞のつもりで云っているのかもしれないが、こんな云い方をされると何か図書館員は、日なたぼっこをしながら本を読んだり、本の番をしているかのように聞え、腹がたってきます。

こんな時、「たしかに一般の人よりは本に接することが多いです。しかし、それは仕事としてですし、普通の読書とは違うのです。読書や勉強は勤務が終えてからです。」等と弁解に似たような説明をしなければなりません。図書館というものが、本があるところ、勉強するところぐらいにしか理解されず、一見、無雑作にならべられたような本、又、その記号も、一つの規則によって体系化されていること等、ましてや、それらを管理、運営をやっている館員の役割等問題外のようなものです。しかし、こうした一般人の認識とは別に、これからの図書館の役割が日増しに大きくなっていくのも社会的要求のようです。とくに、管理、整理等と云った消極的姿勢から、伝達、提供等の積極的姿勢に大きく移り変わろうとしている今日、閲覧課の役割は重大そのものです。

そうしたことを考えると、私達、図書館員の課せられている使命の大きさに、深く反省もし、大きな夢に胸もふくらむ気がします。(H.T.)

あとがき

同志社大学図書館報“びぶりおてか”の創刊号をここにおとどけいたします。

当館で、過去に幾度か館報の発行計画があり乍ら、つい発刊に至らなかったことは、当館の淋しいことの一つでもありました。

“びぶりおてか”の名称は、ラテン語の図書館です。

表紙のスケッチは、住谷悦治総長が特に館報のために筆をふるって下さったものです。

今後、この“びぶりおてか”を、図書館のありのままの報告、紹介、PR、サーヴィス等の窓として、学生、教職員、図書館員間のコミュニケーションをよくする目的のため、編集をしてゆきたいと思っております。ここに読者の御支援、御協力をお願いいたします。

(編集委員)

同志社大学図書館報 “びぶりおてか”

No. 1. 1967年7月1日 発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区烏丸通り今出川 電話 21-2311
編集責任者 日置 芳章